

京都府・私立立命館中学校・高校

土曜授業の改革

教師も生徒も「わくわく」があふれる
「サタデーボックス」で、学ぶ喜びを体感

変革の背景

将来構想に基づき、土曜授業を見直し、「好き」を追究する講座をスタート

2月下旬の土曜日。京都府・私立立命館中学校・高校の体育館では、生徒が3人1組でAED（自動体外式除細動器）の操作訓練をしていた。「呼びかけは大きい声で！」と教師がアドバイスすると、生徒は訓練用的人形に「傷病者発見！」「大丈夫ですか」と呼びかけ、真剣な表情で胸骨圧迫を施した（写真1）。

同じ頃、ある教室では、生徒がボードゲームに熱中していた。「鉄のカードと土のカードを取り換えてくれへん？」「鉄3枚となら

ええわ」などとプレイヤー同士で交渉しながら、勝利を目指していた。また、校舎の最上階では、天文学を研究する大学院生を講師に招いた天体観測を行っていた（写真2）。

それらはいずれも、2022年度に始めた「サタデーボックス」の光景だ。有志の教師が

活動内容を自由に設定した講座を開講し、生徒がその中から自分の興味や希望進路などに応じて参加する。評価にかかわる評価はなく、生徒が学ぶ喜びを体感する場になっている。

サタデーボックスを始めたきっかけは、21年度の教育課程の改訂にあった。20年度、学校法人立命館が示した「学園ビジョンR2030」（*）を踏まえ、同校は将来構想「R2030チャレンジデザイン」（図1）を策定。



写真1 「人が倒れています！どうしよう！」の講座では、生徒は救助者・通報者に分かれ、人形を使った心肺蘇生術を練習した。



写真2 「宇宙を観る阪大大学院生の日々」の講座では、天体望遠鏡で宇宙の何を観測し、どういう情報を得ているのかを、実際に研究者と一緒に体験した。



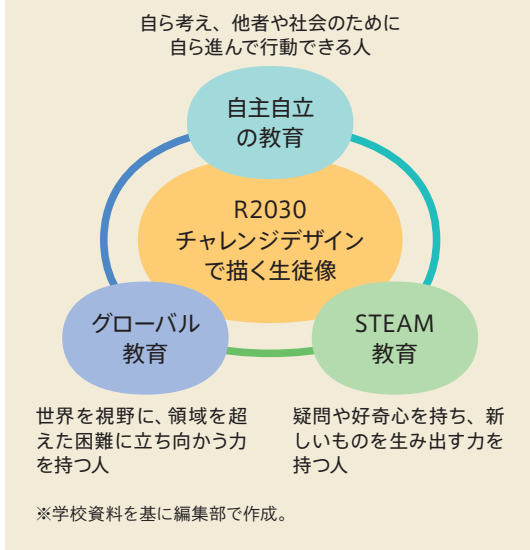
学校概要

- ◎設立 1905（明治38）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 中学校：1学年約240人
高校：1学年約360人

◎2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、京都府立医科大、大阪公立大などに38人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、立命館アジア太平洋大などに延べ413人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

図1 「R2030 チャレンジデザイン」で描く生徒像



そこに描いた「自主自立の教育」「グローバル教育」「STEAM教育」を具現化する教育課程を検討した結果、探究力の一層の育成、生徒の意欲向上やキャリア形成の支援などが方針として打ち出され、授業を週5日にし、土曜日は、探究学習やキャリア学習、学校行事など、生徒の多様な挑戦を支援する日とした。土曜日の活用に関するワーキンググループで、後にサタデーボックス委員長となる小林誠先生が提案したのが、生徒と教師が自由に活動できる講座だった。

「以前から、生徒の学習姿勢が受け身であることに課題を感じ、科目の形で学びが分割されていることに疑問を持っていました。科

図2 「サタデーボックス」実施概要

- **開講日** 土曜日の午前、1コマ50分間を4コマ、全12日
- **開講形態** 3回を1ピリオドとし、3回連続した講座を1回、または1回完結の講座を3回開講。3回連続講座は原則すべて参加する
- **講師** 同校教師、または教師によるコーディネートの下、卒業生や専門家などを講師として招聘
- **講座内容** 講師が活動内容を自由に設定（講座例はP.29図3参照）
- **講座数** 1ピリオド約20講座
- **参加生徒数** 年間延べ約2,000人

※学校資料を基に編集部で作成。

目に関係なく、生徒が自分の好きなことを追究する場が必要だと考えていました」

その提案に白井有紀副校長が賛同したことで、改革が動き出した。

「土曜日の活用について、教師からは、『授業を続けたい』、『部活動に充てたい』といった強い声がありました。しかし、将来構想で打ち出したSTEAM教育や探究学習につながる教育活動を実現すべきだと考えました。小林先生の提案は、教師や生徒の『面白そう』、『やってみたい』といった純粋な思いで成り立つものでした。テストや成績といった外発的な動機ではなく、わくわく感を持つて自らの意志で自律的に学ぶ生徒は、本校が探究的

な教育を発展させていくための原動力になると考えたのです」

変革の一手

教師主体で企画を立案し、「やらされ感」を払拭

小林先生を中心に企画の草案を作成し、22年度は、土曜日の午前に年間12日開講することにした(図2)。開講日の部活動は午後からに限定し、生徒がサタデーボックスと部活動のどちらにも取り組めるようにした。

以前、外部講師を招き、全教師・生徒が参加して行った「土曜講座」は、内容を講師に委ねていたため、生徒も教師も次第に受け身となり、形骸化してしまった。サタデーボックスは教師に講座を設けてもらわなければ成り立たないが、開講は任意とした。企画の概要を説明する職員会議で小林先生は、自身が開講する「泥団子研究所」で作る泥団子を実際に見せて活動の意義を伝えた。すると、瞬く間に10人以上の教師が開講を表明した。

「いくつ開講できるのか不安でしたが、建学の精神の『自由と清新』を重んじる本校の先生方なら、学びを自由に追究する講座に賛同を得られると信じていました」(小林先生)

* 「学園ビジョン R2030」に掲げられた3つの学園像は、「学び続ける社会の拠点としての学園」「人類社会における様々な課題に挑む学園」「ダイバーシティ&インクルージョンを実現する学園」、3つの人間像は、「チャレンジ精神に満ちた人間」「社会の変化に対応し、自ら考え、行動する人間」「グローバル・シチズンシップを備えた人間」、6つの政策目標は、「新たな価値創造の実現」「グローバル社会への主体的貢献」「テクノロジーを生かした教育・研究の進化」「未来社会を描くキャンパス創造」「シームレスな学園展開」「多様性を生かす学園創造」。

最初に手を挙げた教師が中心となって「サタデーボックス実行委員会」を立ち上げ、パンフレットやPR用の旗の製作、講座の予約システムの整備などの準備を進めた。第1ピリオドでは、全24講座の定員300人に対して800人以上の生徒からの申し込みがあった。「生徒は申し込んでくれるだろうか」といった教師の不安は杞憂に終わった。

「生徒は様々な好奇心を持っているのだと実感しました。教科学習や部活動で忙しいはずなのに、どの講座もキャンセル待ちでいっぱいです。生徒の意欲に応える場を学校が提供できたことは、将来構想の実現に向けても大きな意義がありました」（小林先生）

「授業にはない学びを届けたい」 生徒への思いから講座を開講

教師が開講する動機は様々だ。「担当教科の数学と離れて、好きなことができる」と語るのは、趣味の茶道や和菓子の講座を開講した笠巻奈月先生。

「習い事をしたいと思っても、それなりの決意が必要ですし、費用もかかります。その点、学校の講座なら、生徒は気軽にチャレンジできますし、自分に合わないなと思っても、自身の適性を知るよい機会になります。その一助になればと思い、開講しました」

理科担当の奥田一生先生は、生徒の意欲に応える形で、冒頭に紹介したボードゲームの講座を設けた。

「生徒にどんな資質・能力を身につけたいのか、アンケートを取ったところ、圧倒的に多かったのがコミュニケーション力でした。そこで、プレイヤー同士が交渉しながら進めるボードゲームを、コミュニケーション力身につけるツールとして利用することにしました。最初はうまく交渉できなかった生徒が、論理的に話せるようになるなど、授業とは違うやりがいを感じています」

英語科の松尾由紀先生は、生徒の志を育みたいと考え、社会変革の活動に取り組み卒業生に活動内容や思いを語ってもらう講座を設けた。同講座で使用する言語は英語とし、生徒が英語を使って発信する場にもした。

「言語は、知識・技能を習得した上で、何を発信するかが大切です。授業に加えて、生徒が英語で発信できる場をもっと設けたいと思います、講座を活用することにしました」

松尾先生とのチーム・ティーチングで、成績上位層向けのIELTSの講座を担当したアン・フラナガン先生は、講座を通じて生徒が成長する姿を見るのが楽しいと語る。

「授業では発表をよく行いますが、即興的な発信力を伸ばしたい生徒は物足りなく感じていると思います。IELTSの講座では、



生活指導部
川嶋頌梧 かわしま・しょうご
教職歴5年。同校に赴任して3年目。美術科。



入試部
奥田一生 おくだ・いっせい
教職歴6年。同校に赴任して2年目。理科、情報科。



SSH推進機構
笠巻奈月 かさまき・なつき
教職歴11年。同校に赴任して11年目。数学科主任。



グローバル教育部副部長
アン・フラナガン
教職歴28年。同校に赴任して24年目。英語科。



MS推進機構
松尾由紀 まつお・ゆき
教職歴15年。同校に赴任して12年目。英語科。



サタデーボックス実行委員長
小林誠 こばやし・まこと
教職歴19年。同校に赴任して19年目。情報科主任。



中学校副校長
白井有紀 しろい・ゆき
教職歴30年。同校に赴任して25年目。英語科。

図3 サタデーボックスの講座(例)

3回連続講座	IELTSスピーキングに役立つヒント	IELTS テストに向けて、スピーキングについて助言し、様々なトピックを提供。
	映画鑑賞	中高生に見てほしい映画を鑑賞し、映画に隠されたメッセージやメタファーを読み解く。
	音感トレーニング	感じる力や聴く力、音感、リズム感など、すべての音楽に共通して役立つ力を身につける。
単発講座	泥団子研究所	ぴかぴかでもん丸な究極の泥団子を目指して研究を重ねる。
	季節の和菓子をたしなむ	季節ごとに種類が変わる和菓子を通して、四季を愛でる文化を堪能する。
	心理学入門	ワークショップを行いながら、中学・高校の授業にはない心理学に触れる。
	宇宙美しい ビスマス結晶の作り方	ビスマス結晶を作り、その製作過程で表れる、独特の四角い幾何学模様や変色を観察する。

※学校資料を基に編集部で作成。

留学したい、海外で活躍したいという生徒が実践的なやり取りをたくさん経験できる場において、英語がどんどん上手になっていく生徒の姿に、私もやりがいを感じています」

変革の成果・展望

講座を開くことを希望する生徒も。課題は、取り組みの裾野を広げること

サタデーボックス1年目は、全63講座を開

講した(図3)。多くの講座で定員以上の申し込みがあり、活気あふれる活動が展開された。運営面で難しかったのは、部活動との兼ね合いだ。開講日の午前も部活動を実施したいという声は継続してあったが、「授業や行事の枠にとどまらない学びの機会を学校として生徒に保障すること」を説明し、例外は認めなかった。講座内容の設定も難しかったと、小林先生は打ち明ける。

「私は、失敗した理由を考えて改善するプロセスを生徒に体験してもらおうと、『泥団子研究所』の活動計画を立てました。しかし、目標が生徒のレベルと合っておらず、簡単に達成されてしまいました。サタデーボックスは自由な講座とは言え、教科の授業と同じように、生徒の実態を把握した上で目標を設定する大切さを痛感し、計画を再考しました」

建築の講座を担当する美術科の川嶋頌梧先生も、同様のことを感じたと言います。

「まずは成功体験を積めるように最初の課題を簡単にしましたが、興味を失ってしまった生徒がいました。生徒の力を過小評価していたと反省し、次のピリオドでは課題のレベルを上げたところ、生徒は生き生きと取り組み、自分からアイデアを提案してくれる生徒も増えました。今後も生徒と一緒に試行錯誤し、時には私が失敗する姿も見せながら、と

もに学んでいきたいと思っています」

サタデーボックスは、中学生と高校生が一緒に活動するため、講座では学年を超えて交流し、刺激を与え合う姿も見られる。また、受講がきっかけとなり、部活動として競技かるた部や数学同好会を立ち上げようとする生徒や、自分で講座を開きたいと希望する生徒も現れている。学年を超えた交流の広がりや、好きなことを追究する楽しさを実感したことが、生徒の主體的な活動を後押ししている。

教師も、充実した講座とするために、心理学を勉強し直したり、外部人材に協力を依頼したりする中で、好奇心が刺激されて、「わくわく」した日々を過ごしたと振り返る。今後の課題は、取り組みの裾野を広げることだ。

「今年度は定員をオーバーする講座もあったため、生徒の意欲に応えられるよう、講座数を増やしたいと考えています。教師の心が何より動くのは、生徒の成長に触れた時ですから、講座を通じた生徒の反応などを校内で共有しやすくする方法も考えているところです。また、何度も参加する生徒がいる一方で、一度も参加していない生徒もいます。すべての生徒・教師がわくわくし、学ぶ喜びを体感できるような講座を目指して、今後も取り組んでいきます」(小林先生)